

「人間としての感覚が麻痺する」

～考えてみよう～

①「人間としての感覚が麻痺する」ってどんなこと？

◎感覚麻痺したと思うところに線をひこう！

呉屋春子(昭和四年生まれ)

日本軍の駐屯 南部避難 収容所

日本軍の駐屯と陣地構築

昭和十九年(一九四四)の夏頃から数万人の日本兵が沖縄に送り込まれた。日本軍はアメリカ軍の上陸に備え、住民を総動員して飛行場や陣地の構築を突貫工事^{とっかんこうじ}で進めた。兵舎は不足し、学校や瓦屋^{カワラヤ}の民家が収用された。母の実家にも十数人の日本兵が宿泊し、私たちと一緒に生活していた。

その中に、やんばる出身の一等兵がいた。彼は病気でそうとう衰弱し、陣地構築の作業を免除され休養していた。空腹で我慢できなくなった彼は、祖母のシンジグワー(豚肉と豚レバー、野菜を煮込んだ汁もの)を食べてしまった。そのことが兵長に知られ、その病兵はウミチチクルサットーウタン(何度も殴る・蹴るの暴行を受けた)。立てなくなった彼に、兵長はさらにハチメーナービ(大鍋)を被せて「立て」と命令した。彼は氣力をしぼり立とうとしたが立てなかった。それを見ていた兵士たちは笑っていた。本当にかわいそうだった。

私は南風原村(現 南風原町)の陸軍病院や大里村仲程付近の山で壕を掘る作業に動員された。作業内容は壕を掘って出た土を壕の外に運び出すものだった。重い土を運び出す作業は、体力のない私たちには重労働で、しかも真夏の暑い中での作業だったので本当に大変だった。

人間としての感覚が麻痺する

どの集落だったかわからないが、民家で休憩しようと訪ねると、「君たちを入れるとアメリカ軍から攻撃される」といって家主から断られた。他に休める民家はないかと集落中を探し回ったが、見当たらないので最初の民家に行ってみると、カンボウが直撃して一家全滅していた。

犠牲者の肉片が屋敷内の木に付着していた。

^{アラカチ}新垣・^{メーデーラ}真栄平集落一带にはアメリカ軍に追われた多くの住民が押し寄せていた。アメリカ軍の猛攻を受け、その多くが犠牲になった。畑・源やにはたくさんの死体が散乱し、腐乱したものもあり、ハエが群がり、ウジが湧いて膨れ悪臭を放っていた。私たちは死体を避け、あるいは踏んで逃げ回った。

さらに、頭に大きな荷物を抱え、背中に子どもをおんぶしたまうつ伏せになった母子の死体や、亡くなった母親のお乳を吸う赤ちゃんなどのかわいそうな場面に遭遇したが、助けることが出来なかった。また、岩のそばで顔半分が破片で切り取られ、倒れずに座ったままの姿勢で死んでいる日本兵の無残な姿もあった。この一带はまさにこの世の地獄で、そんな死体を見ても「怖い」という感情はなかった。

また、顔と足を負傷して顔面を包帯で巻き、他の兵士に片方の体を支えられ、もう片方は杖をついて島尻に撤退する日本兵に会った。彼はものが見えないし、どこを通っているか知らなかったのだろう。「大里集落」はどこかと聞いたが誰も返事しなかった。無視された兵士は怒り、杖を振り回して殴ろうとしたので私たちはびっくりして逃げた。兵士を怒らせた一因は、誰に聞かれたかわからなかったために返事をしなかった私たちにもあった。負傷兵も戦争の犠牲者であり親切にすべきだったが、戦場ではそれができなかった。

どこを負傷したのか歩行できず、雨でぬかるんだ道をチビスンチャー（おしりを引きずって）撤退する兵士も見た。こんな兵士を見ても、人間としての感覚が麻痺し、他人のことを思いやることができなくなっていた。

◎なぜ感覚が麻痺するようなことが起きたのか、自分の考えを書いてみよう！